

全国公立学校教頭会研究大会 岩手大会

令和四年度 岩手大会実行委員長

相原 伸裕



藩政時代より踊り受け継がれてきた「さんさ踊り」の起源は、三ツ石伝説に由来しています。

「その昔、南部盛岡城下に羅刹らさつという鬼が現れ、悪さをして暴れておりました。困り果てた里人たちは、三ツ石神社の神様に悪鬼の退治を祈願しました。その願いを聞き入れた神様は悪鬼をとらえ、二度と悪さをしないよう誓いの証として、境内の大きな三ツ石に鬼の手形を押させました。（岩に手形：これが「岩手」の名の由来だとも言われています。）鬼の退散を喜んだ里人たちが、三ツ石のまわりを「さんざさんざ」と踊ったのが「さんさ踊り」の始まりだと言われています。」

全国公立学校教頭会研究大会が開催される7月下旬から8月上旬は、東北地方各地では夏祭りが盛んに行われており、岩手大会の開催地である盛岡市では「さんさ踊り」が開催されます。この頃は一年で最も人出が多くにぎやかな雰囲気の時節です。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響によりこの2年間、祭りは中止となっています。令和4年度こそ

は祭りが開催されるのではないかと希望を持ち続けています。

さて、岩手大会の開催方法について、数年前から検討を続けてきました。当初の計画は全国から2,000名を超える参加者を募る予定で、大きなホールも駅前のホテルも予約していました。岡山大会が紙面発表、佐賀大会がオンラインとなる中でも、岩手大会は新型コロナウイルスの終息と参集型の大会開催を目指し準備してきました。しかし、感染症の状況は予想とは異なり、いまだ終息の気配が見られません。

そこで、考え出された開催方法がオンライン方式と参集型を合わせたハイブリッド開催です。岩手大会では、東北各県の参加者には参集していただき、東北以外の参加者にはオンラインで参加していただくというものです。オンラインで参加される皆様にも、岩手大会の意味や岩手らしさといったものを伝えることが難しいと感じていますが、シンポジウムや記念講演を通して、岩手大会の意義を感じてもら

えればと考えています。また、顔を突き合えた研究協議を行うことで、協議が深まり、実効的な研究実践となるものと確信しています。

岩手大会の研究サブテーマは「郷土に愛情と誇りをもち 未来を生きる力を身に付けた子どもの育成を実現する学校づくりの推進」としました。本県教育は、東日本大震災津波で学んだ教訓を学校教育に生かし、未来を創造し、力強く生きていく児童生徒の育成をねらいとしています。本県ばかりでなく、子供たちが時代の進展・変化に的確に対応し、自ら積極的に未来を創造していく意欲を持ち行動する「生きる力」を身につけることが共通の教育目標になっています。そして、副校長・教頭として魅力ある学校づくりのため「社会に開かれた教育課程」の実現をめざす必要があると考えました。

副校長・教頭の職務は多岐にわたります。何より、新型コロナウイルス対応や地震・水害等自然災害への対応等副校長・教頭の果たすべき業務は増える傾向にあります。この仕事は、組織を支え、職員の心を支え、各地域の教育を支える、なくてはならない仕事だということに誇りをもっていききたいと思っています。